

1 前回会長会議以後

本日は、福井大学生協の福井理事長、野尻専務をはじめ福井大学生協の皆様たいへんお世話になりました。福井大学の学長先生にもお会いできました。今日は、時間をいただき、いろいろとお話させていただきました。

何年ぶりかで風邪を引き、喉の具合が悪くなっています。昨日は病院に行ってきましたが、インフルエンザではありません。声が聞き苦しいかと思いますが、ご勘弁いただきます。今回のレジュメは、病院に行ったあとに書いたものです。そのほかに資料として最近書いた論文、「シティズンの事業としての協同組合—大学生協から見た生協学への貢献—」と「大学生協と学生の身体形成—大学教育と学生支援の改善のために—」を付けさせていただきました。もう一つ「歴史を創る！—『大学生協の歴史と未来』の刊行に寄せて—」は、1月の理事会でお話させていただいたものです。今回は、この続きのような話になりますので、標記のような題にさせていただきました。

前回の会長会議（昨年8月）以降、9月には理事長専務理事セミナー、10月にはヨーロッパ社会的経済の視察がありました。12月には総会にあわせてドイツのDSWとの交流をおこなっています。その後、総会で新体制ができ、それをふまえて1月に新旧理事監事交替、その直後に韓国から代表団がこられて交流がありました。さらに2月には、大学生協設立当初の皆様において願い、『歴史と未来』刊行先輩感謝の会を行っています。

それらをふまえて、二つの論文と1月の理事会挨拶を出させていただいたわけです。これらをつうじて私が感じてきた事を、最初に問題提起の意味で話させていただきたいと思います。

2 人間——この憑かれしもの

人間というものは、なにか物語に取り憑かれて、「こういう社会をつくるのだ」とか「新しい社会を実現するのだ」とか言って、必死に動き回り活動し続けるもののようなのです。そういうことを、生協の先輩たちとの交流であらためて感じさせられました。とくに20世紀には大きな物語がいくつかあったと思いますが、その最たるものがカール・マルクスに発するものです。これは生協の先輩にも大きな影響を与えました。

新しい社会を実現するのだとかいろいろなことをするのですが、そのとおりに実現することはまずありません。しかし、必死に活動することで、結果として社会は変わってくる。変わってきて、予想もしなかった事態になることもある。その結果として皮肉なことに、大きな物語が崩壊していくのです。20世紀の80年代から90年代にかけて、そういうことががらがらと起こりました。

その前後から、「物語なしの物語」と私はいつてきましたけれども、大きな物語はすべて空虚であるという「物語」が、若い人たちに広がって影響を及ぼし始めたのです。あらためて物語をつくるのは虚しいのだという雰囲気が広がって、それを前提にたくさんの小さな物語が語られる。そういうことをふまえて、われわれが歩いてきている道、大げさないうと人類史の、大きな筋道が見えてきているのではないかと私は思っています。これもまた、ただ憑かれているだけかもしれません。しかし、これまでもいろいろな経験をしてきていますので、過去のものよりはまだましな物語を、先ほどの二つの論文やすでに出したもののなかで語ってきました。

3 人間——この死すべきもの

ただ、人間はいつか必ず死ぬものですから、それを踏まえればふまえるほど、すべての物語は空虚なものだという思いもあらためてしてきます。そのきっかけの一つは中学時代の親友にたいするガンの告知です。昨年11月にあと6ヶ月だという連絡がありました。いま薬を使って頑張っていますが、そういうことを聞くと、私にも前科がないわけではないので、いずれにしてもまもなくやってくるのだらうという気がします。一つひとつ挙げると切りがありませんが、いろいろな兆候はあります。

一つだけ挙げると、私には二人の娘がいるのですが、上の娘が中学1年生の時に大きな交通事故に遭い、私も弁護士といっしょに現場検証をしましたが、とても助かるとは思えない事故でした。しかし、その場の判断が良かったのだと思いますが、東京でも有数の救急病院に搬送されて命を取り留め、外見上はそういったことがまったくなかったかのような状態に回復しました。そこで、ある大学の心理学に入学し、カウンセラーになるつもりで卒業したのですが、日本では心理療法士などにはほとんど役が与えられません。そのため「医者になる」ともう一度医学部に入りなおし、6年間学んで国家試験を通り、医師になりました。

仙台や鴨川の病院に何年かいたのですが、その後じつは福井に来ています。結婚した相手の転勤でついてきたのですが、ここで1月の末に出産しました。双子だとのことで、過去のことを考えるととても無事には済むまいと思っていたのですが、手術もしないで二人を無事出産しました。今は二人の子育てであたふたしています。驚異的な事態で、たまにはこういうことも起こるようです。私にしてみればいちばん懸念していたことが無事に済んだわけで、「もうお前は死んでもいいよ」といわれているようにも思えてきます。これもまた「死への花道」なのかもしれません。

だからわれわれの世界は、「聖俗遊乱一切皆空」なのです。われわれがもっとも大切だと思っていること、すなわち「聖」がこの世界に意味を与えている。しかしわれわれが毎日やっている「俗」なることは、概してつまらないことです。つまらないから、われわれは「遊」に走る。遊んでいるとシステムがほころんできてボロが見えだし、こんなシステムは変えなくてはいけないといって「乱」が起こる。新しいシステムをつくる時にはまた聖なるご託を並べるのですが、それらはすぐに俗化してまた同じことがくり返される。

歴史というものはそういうもので、だから「一切皆空」なのです。では、おまえが社会や大学生協について言ってきたことは何なのだ、といわれると思いますが、それらはすべて真面目な話で、しかも一切皆空なのです。空というのはそういうことなので、私はもう何十年も前からそう思っています。そこで、元の話に戻ります。

4 そのうえで

人類史、とくに文明化以後の人類史を考えると、社会システムとして大きなものは二つしかありません。一つは、人間の文明が未熟な段階で、自分たちを支配している超越者を想定し、それを恐れ、それに期待する。そのことを具体化するために、自分たちのなかから特定の身体を選んで特異身体とし、それが超越者の具現であるとか、超越者との媒体者であるとかみなして、それに人びとの崇拜を集めて社会をまとめていく。そういう特異身体が皇帝で、皇帝を中心につくられる第一の大きな社会システムが帝国です。

これが文明化以後の社会システムの基本で、このシステムは、ヨーロッパ中心の歴史家が軽視していた多くの地域でも展開されました。インカやマヤやアステカなど原アメリカの歴史もそのことを示していて、そういう意味ではこのシステムに普遍性があるのだと思います。

その帝国のシステムを維持していくのがマツリゴトなわけですが、マツリゴトには二重の意味があって宗教と政治です。その拠点として都市がつくられる。すると都市には必ず

市民が出現する。その市民たちがやがて、自分たちの生活感覚をもとにして、帝国を転覆し、自治し始める。市民たちは、宗教にたいして批判的になり、無神論をすら展開するようになって、やがて自分たち独自の世界の見方と世界への適応方法、すなわち科学技術を生み出していく。並行して、帝国のやり方とは違った自分たちの社会統治の方法を生み出していく。それが民主主義です。

そういうふうにしてできるのが市民社会です。その市民社会が、自治都市の発展に照準して長く取れば10世紀、ルネサンス、宗教改革、大航海を起点として短く取ると6世紀、市民革命に照準してさらに短く取ると4世紀ぐらいのあいだに、世界に広まってきた。市民という言い方には二つあって、フランス語でいえばブルジュワとシトワイヤン、英語でいうとブルジュワとシティズンです。市民の歴史的な性格は、この二重の用語に良く現れている。

ブルジュワとはいわば資本家市民です。資本家が人を雇い、モノをつかって世界中に売りまくる。それをつうじて新しい社会をつかっていく。しかし、じっさいにモノをつくるのは雇われている労働者のほうで、この労働者たちが自分たちにも自由平等の権利を認めろとか、社会の決定に参加する権利を認めろとか主張して参政権運動を始めます。この意味での市民すなわちシティズンが、普遍的な市民として世界中に広がってきたのです。

これ以前、つまり17世紀半ば以降の産業革命の過程では、労働者は資本家に雇われて働くしかなかったのだから、選挙権などなかったわけですから、労働組合をつかって資本に対抗していくしかなかった。しかし、19世紀の前半から労働者は同時に、選挙にも参加させるという運動を始めます。19世紀後半のマルクスは、労働者はもっとまともに、自分の現場で戦えばよいものを、選挙権獲得運動にばかり熱を上げていると文句を言っています。が、両方やっていた結果どちらが効いてきたかということ、長い目で見ると選挙権獲得運動のほうが効いてきたのです。

労働組合は雇われている労働者がつくる組織です。それにたいして協同組合は、ロッチデールの先駆者協同組合をはじめとして、消費者としての労働者が自分たちで事業をやるためにつくった組織です。資本家すなわちブルジュワとは別の、普通の市民すなわちシティズンがつくった組織なのです。そういう意味での協同組合が、その後、農業とか中小企業に広がっていき、大企業にたいして弱小企業を支える組織形態の一つになってきたのです。

5 20世紀（とくに後半）の歴史をつうじて判明したこと

そのうえで、20世紀をつうじて判明したことです。社会主義が登場し、やがて崩壊した。しかしこの社会主義は、私の見方では、前期的社会主義というべきであろうと思います。イギリスで17世紀くらいから、現在の資本主義につながる本格的な資本主義の最初の形態、すなわち初期資本主義が登場しますが、それまでに地中海沿岸などにすでにあった資本主義は、大塚久雄氏などによって前期的資本主義と呼ばれています。この用語法を転用すると、20世紀の社会主義は前期的社会主義であったというべきでしょう。条件が十分ととのうまえに出現した社会主義で、だからこそこれは、持ちこたえられなくて、やがて崩壊していくことになったのです。

もう一つの現実ですが、役割を果たした労働組合が、だんだんシステム内化してきてしまっている。しかし、普通選挙をつうじて市民たちがそのあり方を決めていく市民社会は、普及してきている。そういう市民社会を舞台にして、ブルジュワの事業から出発し、グローバル化した新型金融資本が、跋扈する時代になってきている。だからそのなかで、シティズンの事業としての協同組合の意義が大きくなってきているのではないか。普通の市民が事業の幅を広げていくと同時に、普通選挙のシステムが世界に広まってきているわけですから、それをつうじてつくられる市民の政府が新型金融資本の跋扈を押さえ込んでいく。

そういう時代になってきているのではないのでしょうか。

6 大学教育の普及

そのなかで大学あるいは大学教育が普及してきたわけですが、それにつれて大学の「学校化」ということが言われてきた。学校化をもう少し端的にいうと、大学が高等学校のようになってきているということで、いわゆる大学のユニバーサル化によりあらゆる学生が大学に入ってくるわけですから、昔ふうのやり方で「そんなやつらはもともと大学に入っ

てこられなかったはずだ」などという対応はできない。これはたしか K 大学だったと思いますが、学生総数の 10%がカウンセリングを受けている。そのために、カウンセリングのやり方について、みごとなマニュアルがつくられている。直接問題のある学生にたいしてだけでなく、今や大学はあらゆる種類の学生を抱えているのだから、すべての学生にカウンセリングのように対応しろといっているのです。大学教育自体が、昔のように、先生が自分の専門のことを一方的に「分かるはずだ」というふうに講義して、分からなかったら質問に来いというやり方で対応しているのでは、駄目になってきている。総体としての学生が、カウンセリング的に面倒みないと駄目な状態になってきてしまっているのです。

それと並んで、基本的な生活習慣も形成されないまま大学に入ってくる学生が増えていて、食習慣もきちんとできていない。以前に聞いた話では、食費が 300 円くらいしかない、せめて牛乳とパンを買えばよいものを、お腹が膨れればよいということでスナックと水を買ってしまう。栄養の概念がない学生が増えてきていて、食育をきちんとやらないと駄目だといわれています。

それだけではなく、今日、食堂で食事をしているあいだに福井理事長にうかがったのですが、本当に学生は金がないらしく、食堂はなかなか良い場所にあって立派な建物だと思うのですが、そこまで来ることができない学生も増えている。平均して 350 円くらいの食事なのに、中まで入ってくるすることができない。それ以下のお金しか持っていないから、もっと安いところでお腹を満たそうとする。そういう状況も出てきているようで、これは、学生の質の問題というより、われわれの社会が一昨年の秋以降ひどい状態になってきているということでしょう。

したがってそういうなかで、協同 cooperation というのはお互いに力を合わせて同じ目的を追求することだと思うのですが、協同組合がその意味を学生に教えることの意義がますます高まっています。語学研修やパソコンの講習などをつうじていろいろやっている事例を今まで聞いてきていますが、そういうことの重要性が強まっているのです。大学生協がそういう活動を広めたり、支援したりしていく。それをつうじて大学生協の活動を、世界に広がりつつある市民社会の協同組合——農協漁協や地域生協などいろいろあり、やがて労働者コープも広がるでしょうし、社会的事業を行う生協も広がってくるだろうと思いますが、——につなげていくことが、非常に大切になってきています。そのためにもっと、ヨーロッパの社会的経済や、東南アジア諸国の協同組合法制——一貫して日本よりも進んでいる——などに学んでいく必要があるでしょう。

7 歴史を創るとは?

そういうことをふまえて、「歴史を創るとは?」という話に戻ります。なにかに憑かれて必死に活動する死すべき人間が、結果的に歴史を創っていく。これをヘーゲルは理性の狡智といいました。理性が、本人にもよくわからない形で人間を動かして、最終目標を実現していく。これについて私は、理性を実体化して、信仰の対象にするのは良くないと思ひ、かといって歴史を実体化するのでもなく、歴史が結果的にそういうことも生み出していくのを指摘した方がよいと思ひ、それを歴史の狡知と読み替えていろいろな機会に言っ

ました。

歴史の総体はもとより、これからおこることについてそれが見えることはありえないことです。そればかりでなく、過去のことでも見えていないものが多く、すべてが見えるわけではないので、総体は見えないものですが、できるだけ見ようとしながら、日常の活動（業務を含む）をおこなうことが大切です。そういう意味の活動を、われわれもここ数年やってきたつもりです。

ビジョンとアクションプランは、そのために使われてこそ意義のあるものでしょう。ここで言った「協同・協力・自立・参加」の好循環の意義を自覚し、まずは協同をしっかりとやってみる。その過程で大学とも個別の事情をふまえながら協力し、同時に、自分たちが赤字ばかり出しているたら、それをできるだけ早く克服しなければならない。そのために、学生、院生、教職員に訴えて、参加させる。そういうことを必死でやっているあいだに、われわれは大きな流れのなかに入って行って次の時代を作っていく。そういう大きな循環のなかで、われわれはいるのです。

そういう意味でのわれわれの活動を、これから皆さんに各地に即して報告していただき、現在の大学生協の状況を確認しつつ意見を交換して、これからの半年間に備えなければならないと思います。そういう意味で、あらためて「歴史を創る」という意識を持っていただいて、ぜひ頑張ってくださいたいのです。

そういうお願いをもって、私の挨拶を終わらせていただきたいと思います。

(地域センター会長会議－100304)